



Title	克服・桔抗・模索：文革後中国の文学理論領域の研究
Author(s)	宇野木， 洋
Citation	大阪大学， 2007， 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58798
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	宇野木 洋
本籍 (国籍)	
学位の種類	博士 (言語文化学)
学位記番号	乙 第 6 号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当 論文博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	克服・拮抗・模索 — 文革後中国の文学理論領域の研究 —
論文審査委員	主 査 教 授 青 野 繁 治 副 査 教 授 渡 邊 克 昭 副 査 教 授 田 中 仁 副 査 教 授 市 川 明 副 査 教 授 尾 上 新太郎

論文の内容要旨

本論のテーマは、「無産階級文化大革命」(1966～76年。文革と略称)が終結しポスト文革と呼ばれる新たな状況が出現してから21世紀初頭の現在に到るまでの、およそ四半世紀という激動する時間の流れの中で、中国の文学理論領域(少し視野を広げた言い方をさせてもらえれば人文的言説空間)が、如何なる課題に直面し、その課題と切り結びながら如何なる思考の展開を図ってきたのか、という問題群を重層的に記述することにある。具体的には、文革以前において強大な影響力を備えていた理論に対する批判ないし克服の動向と、ポスト文革期の各時期におけるエポックメイキング的な理論的営為を取り上げ、考察を加えている。対象とした理論的営為が、同時代中国という独自の磁場においては、政治的に問題化されざるを得なかったこともあるため、その理論的営為をめぐる状況そのものに焦点をあてた記述にも紙幅を割いているが、各々の理論的営為の意義とそれが果たした役割を、常に中心に据えながら論じたつもりである。

こうした研究は、日本ではまだほとんど着手できていなかったものと考えられる。だが、ポスト文革期という幾重もの価値転換を迫られた時代を生き抜く中で、隣国の知識人たちが如何に主体的に思考してきたのか、というその軌跡をたどっていく作業は、欧米文化・理論の受容に追われる一方で、「近代」に対する再審という課題に直面しているとも言える、我々日本人にとっても意義深いことではないだろうか。可能な限り、日本における問題群をも意識して論じたつもりでいることも付記しておく。

ポスト文革期の開始を告げる「改革・開放」政策を文学理論領域に置き直すとすれば、「改革」とは脱文革へ向けた着実な歩み、即ち、文革期に猖獗を極めた文学理論的言説への批判・克服の動向を指し、「開放」とは欧米の文学理論的言説の急速な受容に基づく「文学観念」の変革へ向けた動向を指すことになるだろう(もちろん、この2つの課題は相互に関連していたのも間違いないのだが)。

本論の第1編は、こうした「改革」へ向けた歩みを、〈プレモダン〉現象の根深さとその克服とい

う角度から記述している。

第1章では、毛沢東「在延安文芸座談会上的讲话」(1942年)を対象とする。ただし、全面的に論じるというよりは、ポスト文革期において初めて可能になった「講話」とその枠組に対する批判の動向を整理し、「講話」が相対化(歴史的文献化)されていく過程をたどることを目的としている。もちろん、文革とそれへと到る道程において「講話」が果たした役割の重大性に鑑みて、文革以前における「講話」の軌跡(そこには、「講話」をその時代状況なりに相対化しようと試みた理論的営為が、「講話」の名の下に裁断されていったという悲劇も含まれている)に関しても、一定の記述を費やしている。ポスト文革期における批判の動向との連続性と非連続性を、多少なりとも浮き彫りにしてみたいと考えたからにはほかならない。

第2章は、文芸政策的な性格が色濃く、それ故に文学理論プロパーの問題への言及に極めて乏しい「講話」を補完し、いわば「講話」における創作方法の役割を担った「革命現実主義和革命浪漫主義相结合」(「両結合」)の、1958年における提唱からポスト文革期における消滅に到るまでの軌跡を記述している。「大躍進」政策の展開という時代的影響を帯びて理論形成された「両結合」は、そこに内包された論理によって、結局は、現実存在する矛盾を隠蔽し現実を美化していく機能を果たすこととなり、遂には、「三突出」論に象徴される文革的文学理論を準備するに到ったと言えよう。ポスト文革期における「両結合」批判の歩みは、総体として見れば、現実存在する矛盾を認識する創作方法としての「リアリズムの復権」の過程と整理でき、そうした動向が、「傷痕文学」「反思文学」などと呼ばれる新たな小説群の誕生を促したのである。

第2編は、文学理論領域における「開放」の動向、即ち、1980年代前半より顕著になってきた欧米理論の受容をめぐる問題群を、〈モダン〉現象との拮抗と多元化いう角度から記述している。

第1章では、徐敬亜「崛起的詩群——我国詩歌的現代傾向」(1983年)を取り上げ、ポスト文革期における欧米理論受容が、如何なる地点からスタートしたのか、また、それに対する反応(批判・排除反応も含めて)とは如何なるものであったのか、といった問題を論じている。「崛起的詩群」は、いわゆる「朦朧詩」を擁護するために、欧米の「現代主義」に高い評価を与えた、当時においては画期的な理論的営為だったが、その一方で、欧米「現代主義」が批判の対象としていた、「近代」が培ってきた伝統的な人間観をも礼賛していた。即ち、「崛起的詩群」には矛盾、敢えて言えば「現代主義」に対する一種の「誤読」が存在していたのである。欧米理論受容の初期における問題状況の一面を浮き彫りにしたと言えよう。なお、「崛起的詩群」は、「資産階級自由化」思潮の1つとして批判されており、〈プレモダン〉現象の根深さを改めて思い知らされるしかない。

第2章は、特定の理論的営為を取り上げるのではなく、1980年代中期以降の欧米理論受容の諸相を記述することを目的としている。多種多様な欧米理論が想像を超えるスピードで流入する過程で伝統的「文学観念」の変革が叫ばれ、従来のマルクス主義的な文学研究方法ではない「新方法論」が探求されていき、1985年は「方法論年」と呼ばれるまでになっていく。だが、欧米理論はそれだ

けで全て価値があるという視点に立った無条件的な受容というレベルに終始していたのも事実だった。こうした状況から一步踏み出して、中国独自の理論的営為の創出を目指そうとした試みに「文学主体性」論があり、その後、「偽現代派」概念の提出、「尋根文学」への注視そして「劉再復現象」批判などといった理論的営為が展開されていく。だが、残念ながら、そうした営みがある程度の結実を見せる直前に「六四・天安門事件」（1989年）が勃発してしまい、「挫折」を余儀なくされたのだった。

第3章では、1980年代の文学理論領域で最も大きな影響力を持った「文学主体性」論を取り上げる。劉再復「論文学的主体性」（1985～6年）を中心に据えながら、「文学主体性」論の意義と、それが引き起こした論争の軌跡を記述している。人間性を蹂躪し尽くした文革に対する強固な反省の上に立って、文学研究における人間性の回復を宣言した「文学主体性」論は、欧米理論を着実に消化しつつ、中国独自の新たな文学理論を生み出そうという意欲にあふれた理論的営為だったと言える。だが、それ故に、伝統的「文学観念」の側からは厳しい批判が加えられる。ただし、論争を通じて、逆に「文学観念」変革の必要性が定着していったこと、また、より深く欧米理論を受容した若手研究者層から、「文学主体性」論の意義を認めた上で、その「弱点」を問う議論が提出されたことなどは、意義深いことだった。なお、劉再復は、「六四・天安門事件」の勃発により国外脱出しているが、海外移住後の劉再復の理論的営為についても、その一端を紹介し考察を加えている。

第3編は、鄧小平「南巡講話」（1992年）以降、市場経済の全面展開にともなう文化・社会状況のすさまじいばかりの変貌ぶりに直面した文学理論領域が、商業主義に対する自己の「無力」を思い知らされながらも、現実社会が抱える問題に必死に取り組もうとしてきた営みを、〈ポストモダン〉現象への戸惑いと模索という角度から記述している。

第1章では、趙毅衡『「後学」与中国新保守主義』（1995年）を中心的に取り上げ、「後学」（後現代主義・後結構主義・後殖民主義など「後」を冠した諸理論の総称）をめぐる問題に考察を加えている。「市場社会」が生み出した文学・文化現象に直面して、当初は、ただ戸惑うしかなかった文学理論領域だが、その後、欧米の後現代主義理論などを受容することにより、それを参照系として新たな現象を読み解く作業に飛びついていく。「後学」熱の出現である。だが、こうした理論的営為の多くは、直面する文化・社会状況を「後学」によって解釈するだけに留まり、結局のところ、現実を安易に肯定・容認していく傾向が強かった。趙毅衡は、欧米では文化・社会に対する批判理論として機能した「後学」が、中国においては「新保守主義」に陥っていると批判し、これを契機に「後学」論争が展開されていく。だが、論争における応酬は激しかったが、理論的な深化はさほど見受けられなかった。その最大の原因は、相互関連はあるものの、異なる立脚点から生じた諸理論を、「後学」と十把一絡げに捉えるアバウトな発想にこそ存在したと言えるのだ。

第2章では、王暉「当代中国的思想状况和現代性問題」（1997年）を取り上げる。王暉は文学研究者だが、この論考は、文学理論領域を大きく踏み越えている。だが、同時代中国の社会・文化状

況を考察する際の基本問題を論じており、かつ、世紀末の知識界に生じた「新左派」と「自由主義」の対立という磁場においては、図らずも「新左派」側の代表的論考と位置づけられて社会的にも話題を呼んだので、本論でも記述の対象とした。汪暉の主張は、「市場社会」の出現によって、様々な矛盾が深刻化し危機に直面しているにもかかわらず、知識人たちが一種の思考停止状況に留まっている現状においては、従来、自明のものとされてきた「近代」ないし「近代化」それ自身を問題化し、再審に付すことが必要ではないか、という点にあった。だがその際に、マルクス主義は「反近代の近代性」という側面を備えているとして「親近感」を示すと同時に、市場経済と全球化が内包する根底的な問題点に言及したことにより、「自由主義」論者たちの批判にさらされたのだった。汪暉は、続編『『新自由主義』的歴史根源及其批判——再論当代中国大陆的思想状況与現代性問題』（2001年。台湾で発表）において、「自由主義」は、欧米・日本における支配イデオロギー、即ち、市場経済万能論を基礎にした「新自由主義」の中国版だと明確に規定し、反論するに到っている。現在の日本が直面している問題とも呼応した議論と言えるだろう。

ポスト文革期の文学理論領域が、直面する問題群と格闘し続けてきた軌跡をたどり終わって、改めて考えさせられることは、現在、日中における同質（顕現は異なりながらも）の問題群をめぐる真剣な「対話」が可能だし必要ではないか、という点である。「対話」を深めつつ、同時代中国の文学理論領域の今後の展開を見守っていきたいと考えている。

論文審査の結果の要旨

宇野木洋氏は、一貫して現代中国の文学理論および文学思想を研究対象としてきた。本論文はその宇野木氏が、文化大革命以後の中国において、西欧現代思想の輸入をめぐる繰り広げられた学術的論争を、長年にわたる粘り強い解説の作業を通じて整理・叙述したものであり、その研究の集大成とも言えるものである。

論文審査が始まってまもなく、宇野木氏は世界思想社より、『克服・拮抗・模索——文革後中国の文学理論領域』（2006.3.30 発行）を上梓した。同書は本論文をもとに、書籍として出版するのに必要な若干の字句的修正（誤字の訂正、サマリーの削除など）を加えたものであるが、基本的には本論文と同じものである。

本論文において、著者宇野木氏はポスト文革期の中国の思想状況を＜プレモダン＞——＜モダン＞——＜ポストモダン＞という概念を寄りどころとしながら整理していく。

「第1編 ＜プレモダン＞現象の根深さとその克服」では、まず毛沢東の『文芸講話』および「革命的リアリズムと革命的ロマンチズムの結合」理論の果たした役割と、80年代以降のそれらへの批判・克服状況及びそれらを擁護する立場からの反批判を紹介しながら、89年6月の天安門事件を引き起こすに至った＜プレモダン＞的状況の根深さを叙述する。『文芸講話』の問題については、近年の中国において解明されてきている『文芸講話』成立過程に関する研究をふまえ、胡風の「意見書」の提出とそれをめぐる思想闘争の状況を＜プレモダン＞的状況として捉えている。また大躍進政策を背景とする「両結合」提起後、ロマン主義を強調する傾向が助長されるのに、＜プレモダン＞的状況が関与したこと、その文革後の反省としてリアリズムの復権が叫ばれたことなどが言及される。

「第2編 <モダン>現象との拮抗と多元化」においては、徐敬亜の「崛起的詩群」および劉再復の「文学主体性論」をめぐる論争を通じて、中国的モダニズム言説の展開が、<プレモダン>（例えば陳涌、姚雪垠）<ポストモダン>（例えば劉曉波）の両方から攻撃をうけるという重層的な問題構造を叙述し、徐敬亜、劉再復における<モダン>言説へのそれぞれの「誤読」とその背景などにも言及し、さらに六四天安門事件による挫折へと至る流れを追う。

「第3編 <ポストモダン>現象への戸惑いと模索」では、趙毅衡の「後学と中国新保守主義」が、ポストモダン、ポスト構造主義、ポストコロニアリズムなどを「後学」として一括りにしたアバウトさをもちながらも、「ポストモダン」論者は現体制擁護の「新保守主義」に陥っていると指摘し得たことを評価した。また「新左派」と「新自由主義」の論争における汪輝の「ポスト文革期の様々な文化・思想的営為を丁寧に跡付け総括していく作業を通じて<近代性>をめぐる問題群を浮き彫りにし、それと正面から向き合いながら思考を深化させようとする試み」を高く評価する。

また、このような中国的近代化の課題と、西欧の現代思想との拮抗、模索といった関係が、日本における戦後の「近代の超克」問題ともリンクしていること、中国において竹内好の影響下に論を立てる研究者が登場してきていることなどを踏まえ、日本において、中国のこのような問題を考えることは、日本の現代思想のあり方そのものを問い直すことにも繋がる、という問題認識も提示している。

以上のように、本論文は、ポスト文革期における中国の複雑な思想的営為の流れを、<プレモダン>の克服、西欧現代思想（<モダン>）との拮抗、<ポストモダン>への模索という視点から手際よく整理し（ある意味で、きれいに整理できすぎて、どうなのだろう、という批判があったのも事実である）、叙述している。中国思想界に西欧現代思想に対する中国的「誤読」があり、かつまた論者毎の用語の不統一がある状況のもとで、難解かつ膨大な論文群の読解を精力的にこなし、ここまで整理することができたのは、ひとえに著者の西欧現代思想及び中国的社会状況に対する並々ならぬ関心と理解そして力量があったからこそであると考えられる。

「モダン」というキーワードの定義や「誤読」という用語の西洋との食い違い、西欧におけるリアリズム・表現主義論争との関連性への論及の欠如、「両結合」理論と「民歌」の問題および徐敬亜の「現代詩」についての議論を除けば、やや理論に関する叙述に偏して、実作に関する検討が少なく、「尋根文学」におけるモダニズム的表現や王朔の「ポストモダン」的作品に関する検討を欠いている…など、最終試験において、不十分な点の指摘があったが、それらの点が補充されれば、更に読者への説得力を増すであろうと思われる。むしろ、これだけの複雑な思想状況がここまで手際よく整理できていることだけで、すでに労作であると思えるべきであろう。

現在、中国の市場経済のあり方をめぐって「新左派」と「自由主義」の論争が繰り広げられ、日本の研究者の注目するところともなっている政治・経済・思想の横断的研究分野であるが、現在の問題がどのように形成されてきたのか、を考えると、その基本的枠組みを提供してくれるのがこの論文であると考えてよい。

以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士号を授与するのに適格であると判断した。

2006年10月19日

